

192. 大雨への備え

技術戦略部 資源エネルギー技術課長 桑嶋 知哉

新元号への切り替えから2か月が過ぎ、“令和”にも慣れてきましたが、7月後半となり、今年も残り半分を切りました。各地で梅雨明けとなり、これから本格的な夏に突入します。ご承知のとおり、「梅雨」は日本を含む東アジア広範囲で見られる気象現象で、5月～7月にかけての曇りや雨の多い時期のことで、気象庁では都府県を数個にまとめた地域ごとでの梅雨入り・梅雨明けの発表をしています。ちなみに、今年の九州北部・四国・中国・近畿における「梅雨入り（したとみられる）」の発表は6/26で記録的に遅い時期でした。一方、昨年は関東甲信地方で初めて6月中に梅雨が明けました。統計を取り続ければ、必ず新記録が出るものですが、2年続けての極端な気象現象は好ましくないように感じます。梅雨の期間が長くても短くても、大雨には十分な注意や備えが必要であることに変わりありません。

日本では、梅雨が明けても10月頃までは台風や前線停滞等による大雨の心配な季節が続きます。ジメジメとした日が続く梅雨のような鬱陶しさはありませんが、強い勢力の台風接近時などには、十分な備えが必要となります。様々な報道にもありますが、強い勢力を維持したままの台風が日本に接近することが、ここ数年多いように感じられます。地球温暖化の影響が台風の大きさや強さに及んでいると結論づけられていませんが、もし、そうであれば、今後益々被害の増大が懸念されます。いずれにしても、日頃から大雨への備えが必要な季節ですが、近年はわかりやすく工夫された気象情報がインターネットで容易に入手でき、場所や時間を問わず日本各地の降雨予測等を見ることができるのは非常に助かります。

大雨に関しての情報で、「1時間に○○mm」、「24時間に○○mm」、「2日で1か月分の雨量」などに加えて「50年に一度の大雨」という表現を見ることがあります。今年も5月に与那国島などで「50年に一度の大雨」で被害が出たことが報じられました。この「50年に一度の大雨」という言葉が広く流れるようになったのは、2013年に気象庁が特別警報を運用開始するにあたり、その発表基準を算出した以降です。確率降水量はその地点での過去の降雨データをもとに「この規模の大雨は、平均すると○年に一度の確率で起こる」というものを統計学的に算出したものとのこと（確率なので、期間内で2回以上起こることも、一度も起きないこともあります）。下水道における雨水計画と単純な対比はできませんが、少なくとも「50年に一度の大雨」は異常な事態であると推察できます。日本は南北に長く、雨の降り方にもかなり地域差がありますが、ある地域で「50年に一度の大雨」と聞けば、その地域が大変な状況になっていることは容易に想像できますし、近隣で起こった場合は、危険な状況が自分に迫っていると認識できます。大雨に限らず様々

な情報が24時間発信されている中、その情報を聞いた時に本来持つべき危機感を欠如しないよう、素直に情報を受入れ、適切な判断ができるよう常に意識していなければと感じています。

来月上旬には「下水道展」と「下水道研究発表会」が横浜市で開催されます。例年よりやや遅めの開催です。年に1度の下水道界の大イベントですので、大雨の心配が不要な好天の一週間になって欲しいものです（猛暑も困りますが...）。